

# 石川宗家系、尾島系、宇野系らんちゅうに関する一知見

## ※ 石川宗家(二代目 亀吉翁)との出会い

私は、15歳で東京の雪ヶ谷にお住まいの直井銀三郎師匠(同好会会主)に弟子入りしました。弟子入りとはいっても高校、大学生 活がありましたのでウイークデーは早朝4時～7時、休日、冬、春、夏休み中は朝から時間の許すまででした。

当時は、東京の愛好会は、各会とも特徴があり、若い私は好奇心の塊のようなもので、師匠に内緒でまず、王子の石川宗家を訪ねました。宗家につくとまず驚いたのは、池が動物園のような頑丈な金網で囲まれており、その中で、亀吉翁がらんちゅうの世話をしていたことです。

「こんにちは、らんちゅうを見せてください。」と私が言いますと亀吉翁の応答は、子供がくる所ではないとの一言でした。

それでも、私は、宗家のらんちゅうが見たくて訪ね続けました。6回目にして初めて「君はらんちゅうが好きかい。」の言葉をかけて いただいたのが、亀吉翁と私のらんちゅう会話の始まりでした。その後、何回か訪ねましたが、らんちゅうに関する教訓として、私の脳裏に今でも残っていることが二つあります。

その一つは、「らんちゅうは背びれを除去した金魚である以上、胴体が丸く体形がくし型になっていて、背なりが綺麗でなくてははいけないのです。」と言われたことです。

このことから亀吉翁はらんちゅうの見識について、背なりの美しさを重要視していることを痛感した次第です。



亀吉翁が理想とした魚に近い背成り魚(桐生本多氏が亀吉翁の種魚をもとに作出した魚)

二つ目は「君は横浜に住んでいて私宅にすぐこられるが、宇野君などは、遠方の京都から来て観魚会の大会に毎年参加しているのです。そして、その都度、尾島君の出品魚(優等魚)を購入して持ち帰っているのですよ。」と話されました。つまり、上には上があるということでした。

その当時の私には、宇野先生がどのような方なのか、どのような形のらんちゅうを京都へ持ち帰られたのかについては、知るよしもありませんでした。

現在64歳の私としては、らんちゅう界の草分け的存在である亀吉翁とほんの少しではあってもらんちゅうの会話が出来たことを誇りにしております。

## ※ 尾島先生との出会い

私の尾島先生との出会いは、先生本人との出会いよりも先生の魚との出会いが先でした。と申しますのは、東京都文京区にお住まいで、後に東京の愛魚会の会長になられた重政さん(個人的な仕事上の知人)から電話があり、「野木さん、尾島先生の当才魚を10尾いただけることになったので5尾わけてあげます。」ということがあったからです。私は石川亀吉翁から、宇野先生が京都へ持ち帰った魚(観魚会での優等魚)のほとんどが尾島先生の出品魚であることを聞いておりましたので重政さんの電話を受け、天にもものぼる思いで重政さん宅を訪ねたのを今でも鮮明に思い出します。そのときの魚は鱗が細かく、頭部が上を向き、体色は黄系でしたが、洗面器に入れると体の割りに大きく見える魚でした。この時の魚たちが、その後の私のらんちゅう人生を大きく変えたことは言うまでもありません。

その後、私は、尾島先生の魚をそっくり引き継がれた東京荒川の鈴木康宏氏(元日本らんちゅう協会東部本部長)宅で和服姿の尾島先生と感動の対面をすることに成り、鈴木氏が作出した当才魚を尾島先生が選別なさるのを直接見る事が出来ました。あまりの選別の早さに吃驚している居合わせた数人の愛好家に対して、尾島先生曰く[自分の血統魚だから出来るのですよ。]でした。

また選別のポイントとしては、背腰の良否にはあまりこだわらず、上見で眼先があり、頭が上向きで、遊泳の上手な魚を良魚としていたのではないかと考えられます。



尾島系 初めての仔引魚、日本らんちゅう協会優等魚



後で分かったことですが、らんちゅうの良否を判定する基準には、愛魚家個人ごとの好みがあり、そのために、各地に同じ形のらんちゅうを愛する同好会が作られていったものと思われます。

当然観魚会内でも同様に上述した亀吉翁の背なりの綺麗な櫛型らんちゅう(横見を重視)を上とする考え方と尾島先生・伴先生・太田先生を中心とする横見では少々の難点はあっても、上見で魅力を持ち合わせたらんちゅうを上とするグループとに見解が分かれ、それが現在の愛魚会の全身である味魚クラブの誕生となったのでした。

このようにして完成をみた尾島系らんちゅうはその後、鈴木康宏氏(故人)に引き継がれ、現在は千葉県在住の桜井享氏に引き継がれております。

一口に尾島系と言っても、サラブレッドが時代とともに馬体に変化していると同様に、少々は頭型や体型に変化が見られるのは当然と言えます。私も現在、前述した重政氏、太田氏、鈴木氏との交流関係から得た尾島系らんちゅうの保存に、微力ながら今後も努力していく所存です。

## ※ 宇野先生との出会い

昭和40年日本らんちゅう協会全国品評大会の当才魚の部に私が出品した魚を宇野先生が見られ、「横浜にも私と同系統の魚を飼っている人がいる」と言われたのが、先生と私の出会いの始まりでした。宇野先生は、何事にも慎重な方でしたから、当時宇野先生のミジンコ採りを一手に引き受けておられた奈良の河関氏を先ず私宅まで出向かせ、全国大会に出品した魚が、本当に野木が作った魚かそれとも他から譲り受けた魚かを確認させました。その2、3日後に先生自ら私宅の訪問となりましたのが、次に挙げた写真です。現在64歳の私が、結婚間もない20代でした。

私はそれまでに前述した直井師匠を始め、二代目宗家亀吉翁、尾島先生、太田先生、小竹先生、鈴木康宏氏等々日本を代表する諸先輩にご指導を受けました。しかし、宇野先生の場合は京都にお住まいの為、出会いから亡くなるまで先生宅を私が訪ねることが出来たのは、年に1~2回程度でした。特に強烈な印象として今でも私のらんちゅう飼育の参考とさせていただいているのが、[らんちゅう飼育を科学する。]ことです。だから現在でも、宇野先生こそ、[らんちゅう飼育を科学する]先駆者と考えております。



宇野先生と私(私宅 池を前に 昭和40年)



宇野先生晩年、初めて陶芸作品室へ

その理由の第一は、農学博士で東大教授の松井佳一先生に師事し、遺伝学の中の形態遺伝法をらんちゅうの良否判定に用いられた事です。このことは、先生は色で云えば、腰白や、面かぶりといった配色のらんちゅうや、頭で言えば獅子頭をきっちりと表現しているらんちゅうを、選別で残していく魚の基準としたものと考えます。

第二には、京都大学の医学部に通い、尾島系らんちゅうの頭を持ち上げ、体を大きく見せるらんちゅうの解明にX線写真を用い、体形の研究をなされたことです。

第三には、更紗模様のらんちゅうの赤色の美しさを表現する為に、当時、東京で、紅色の素赤らんちゅうを専門に作られた、赤羽の盛田庄太郎氏の魚を種親として雄、雌のどちらかに使用した事です。



宇野先生より初めていただいた種親(メス)



宇野先生宅の池の前にて

以上、3人の偉大な先輩のらんちゅう作りについて、大変失礼とは存じますが現在の魚評にたとえてまとめてみます、

石川亀吉翁は、文句なしの背成りと骨格を持ち合わせた現代らんちゅうを、国内外に広めたこと（フランスに長期滞在指導、日本のらんちゅうを普及させた）他に類を見ない名人である。

尾島先生は、らんちゅうの重心をなるべく体形の後方に持つことにより、頭の上向きが強調され、体は小さくても大きく見せる獅子頭のらんちゅうの形を完成させた名人である。

宇野先生は、らんちゅう飼育を科学する事によって、京都の土地柄に合った、鱗並びの綺麗な、かつ、可愛い獅子頭の京美人的らんちゅうの形を完成させた名人である。

このようなすばらしい先生方に直接お会いし、お話を聞くことが出来たのは、私のらんちゅう人生にとって大きな財産です。そのため、後進の愛好家に私が先生方から学んだことを伝えるべく、各々の先生方の特質を生かしたらんちゅう作りを心がけ、指導しています。

国内はもとより、英国等の海外の愛好家とも交流を持ち、尾島系並びに宇野系の魚を軸とした美しいらんちゅうを作るため、様々な方面での研究に力を入れています。

それが[らんちゅう飼育を科学する]ことであり、更なるらんちゅう界の発展につながることを信じて尽力して参りたいと思っています。